松本部室 No.1

新人合宿
報告書

—1972年度 6/2～6/9—

信州大学山岳会

巻頭言　新人合宿をおえて

本来SACとして3つの山岳部合同でやる新人合宿であったのが、結果的には、伊那、松本と長野の2つの山岳部で新人合宿を行ったことになってしまった。原因として諸事情によって入山できない者が上田の上級生にかたまってしまったという言だが、これはこれでいいとして、各山岳部間の連絡の不備など、この3つの山岳部は、一つ一つが単なるグループではなく一つ一つ独立した組織である事をよく認識して、各代表の人達は、しっかりとした態度をとってもらいたい。又合宿終了後のSACとしての反省もあまり真剣味のある反省はなされなかったなど、これでは、いくらSACとして新人合宿を行なおうとして皆が苦労しても何の意味もないのではないだろうか。

新人の雪上技術の訓練は、普通程度にはできたが、上級部員、小生も含めての新人合宿に対する意識が低かったのではないだろうか。

「新人合宿」この名前の通りでの新人の訓練はある程度満足できるものがやれたとしても、新人以外の上級生部員の問題、SACとしての問題が残ってしまったという感がする。

もうすぐ夏山、各自夏山を楽しむと同時に自分をのばしてほしい。

CL、小根田一郎

新人合宿 まとめ(昭和47年度)

(1) 各山岳部反省見解

長野

- 三年部員のmembership不足。
- C.L., S.L.間の協議不足。
- Tent-leaderの役割がはっきりわかっていない。
- 新人の火器使用未熟、又二年生も不確実で新人に指導できる状態にたかった。

上田 --(出ていない)

伊那松本

- 部で受け持った装備係に関して、係内での計画の進め方が、計画段階において三年生一人でやってしまい二年生が全くタッチしていなかったが、あるリーダー部員の、合宿では意図しない指示に係が従ったという、ある程度やむを得ない事情があったためで仕方がない。
- ほか、入山時、一つのPartyに1setのテントを持たせるなり、荷札をつけておくべきだった。入山中の装備の管理は、二年生中心にだいたいできていた。
- 各学年別にみると、新人に関して、雪上技術は一応の形は教えられたし、量としては充分できた。入山前の新人指導の不足により火器の扱いが悪く不慣れだった。生活すべてにおいて時間的に遅くオソイということはあるが、一応やるべき事はわかったと見ている。

二年生に関して、雪上技術のストップは普通、キックステップはぎこちなさはとれたが、細かい形については不正確。グリセードはまだ不安定。コンテ、スタカットは形はわかったのからザイルワークは今後一層の努力でしっかり身につけてほしい。生活のことでは、自分のやるべきことはやっているが、新人をうまく動かせない。一般に新人への注意がまだ不足しており、行動中Partyのtopで歩くことの役割に対する認識が不足している。体力がこれは非常に不足している。

三年生の雪上技術は全般的にまあまあできている。生活において指示は一応していたがテント内のムード作り、Party内でのムード作りが不足していた。又、Partyリーダーが三年生のときに他の三年生の協力が足りない。又、三年生リーダーは同学年以上のメンバーの動かしかなどでリーダーシップが不足していた。

SAC全体でやった事については、二年生以下、特に新人にとっては各山岳部や上級生や一年生同志の親睦という面での利点があるが部全体としてみればそれを上まわるほど負担が大きい。その点では各部別々に行った方がよい。しかし、他部の部員(特に長野部員)との山行が増えてきて一般化しつつある現在、山行許可時の判断の参考として又、他山岳部員の程度を知るという点から、少なくとも長野山岳部とはいっしょに行ったらいいのではないかという意見があったことを付記しておく。

〔各山岳部リーダー会〕

(2)各段階における反省

(2)◎計画段階

・前年度の冬山前くらいまでにC.L.などの体系を決定しておくべきだった。
・各山岳部間において、又C.L.と各係との間においての連絡が不徹底かつ不足していた。

◎準備段階

・入山できなくても準備に来られる者は来るべきだ。

◎入山(B.C.設営まで)

・入山時Party Leader(三年生)に一部四年生が必要以上に口を出していた。
・一部三年生のリーダーシップ不足。
・二年生の体力不足が目についた。
・新人(M)に関する処置は妥当なものだった。

◎B.C.及び周辺

・翌日の行動予定の打ち合わせはC.L.1人で決定してしまわず、四年生間で打ち合わせておくべきだった。
・四年生の訓練も明確に予定に組み込むべきだった。
・もっと三年生を多く動かすことができた。
・一年生の雪上訓練の指導などは三年生にまかせてもよかった。
・一年生の医療品使用時に上級生がついてやるべきだった。
・朝文社などの取材は、合宿の時は断わった方がよい。

◎下山及び跡始末

○装備点検など、跡始末が時間がかかりすぎたし、又、その後の跡始末も非常に悪い。

[SAC委員会]

各係反省

○ESSEN係

I 〈朝〉 特別になし。あんなものではないだろうか。調味量は少なかった。

〈昼〉 量的にも質的にも少なかった。あれだけの行動時間で。もっと神経を使ってよかった。(アメなど)

〈晩〉 総じてよかった。最近1人1.7合は多いのではなかろうか?

II 総合 新人合宿のESSEN計画はあんなものであろう。作る人間に問題があると同時に、味付けにもっと注意すればよかった。
ヒロンチフードはいったいてヒロンチに役立つか? きわめて形式的なものであったように思われる。この人数40人で朝の30分というESSEN時間は短かすぎる。
火器がはんぱであった。(ホエーブス5台これが問題)
ESSENの人数はあんなものではよかった。

III エピローグ

新人合宿にて、朝昼晩ともりたくさんのメニューを実際、食べてみたのであるが、今後これはマズイとか、少ないとか、カロリーで問題があるとかを、新人がとらえ、これから何かをとらえて将来にすばらしいESSENにするための布石にしてほしい。

○ 渉外係

各係の借用に関する細い打ち合せをしておかなかった事。例えば、ハカリなど、教養部に、一往生を走らせてしまった。寮で寝るか、体育館で寝るか、一存で決めるべきでした。一番のミスは、島々からの出発の時刻を遅らせてしまった事です。必ずバテるのは、わかっているのだから、バスにすべきでした。

○ 医療係

まず各部もち寄りで医療を調達したわけだが、各部の薬品の種類、量がマチマチであったので、それを組別にして整理よく使用することが出来なかった。及び、使用後の後片づけも乱雑ではなかったか。使用後は、面倒なことはわかるが、もっとズクを出して欲しい。

会話

渡部「反省ということだが、俺達に医療の知識が欠けているから見つからないのではないか。反省が。まあそれが反省でもあるわけだ。」

中田「でも、俺は医者ではない。どこまでの知識で必要充分なのか、わかるはずがない。只、この薬品は、どんな時に使用するか、憶えているだけだ。第一、山でのケガや病気はそれでたり得るのではないか。」

渡部「でも、結果としてあんなことになったというのは、俺達の責任でもあるわけだ。」

中田「ある。とすればどこか。」

渡部「亀ズレ予防の注意だけでなく、後の処置の仕方の注意も必要だった。」

中田「でもそれは、当事者個人のズクの出し方ではないのか。」

我々は、やはり自分の役目に忠実では、なかったのかもしれない。我々は、ケガをした当人ではない。その痛みは、わからぬ。でも一緒になって施策する心構えがあって、

しかるべきであった。しかし当事者達はもっと、自分の肉体を大事に扱い、こまめに消毒などを繰り返すズクを出してもらいたかった。

○装備係

反省会に出た主なるものをあげたい。

一、装備係が2年生ばかりで、装備の方にかかりきりになることになり、2年生の他の仕事が出来ない。

一、テントに荷札をつけるべきであった。

一、2年生の装備係が多すぎる。(一部の者の意見)

一、要望として、自分の持ったものは、はっきりさせて欲しい。

装備C.として　臼井、

今回装備は、伊那、松本が受け持ったわけであるが、決して、うまく出来たとはいいがたい。それは、装備係間の連絡不徹底といおうか、松本班は小生一人、伊那班は2年生4人という構成のため、いきおい準備は、小生、入山線は2年生という形をとらざるを得なかった。

これでは、松本と長野がやったと同じである。そこで要望したいのは、部員構成も考えて、係の割り当てをしてもらいたいということである。昨年たしかに長野は装備係をやったかもしれないが、昨年は昨年、今年は今年で、やりやすい形で係をやってほしいのである。さもなければ、松本の3年生でやるといったように、もう少し、考えてほしかった。

行動記録

6/2　○ → ◎　松本から明神まで

徳本峠までのメンバー表　( )内は部歴　各パーティの先頭がパーティリーダー

C.L　小根田(4)

A. 川口(3) 野口(3) 棚橋(2) 今尾(1) 福島(1)

B. 菊地(3) 大安(4) 疫部(3) 鈴木(2) 三村(1) 吉田(1) 氏家(1)

C. 高橋(3) 三坂(4) 小川(2) 近藤(1) 新疫戸(1)

D. 中田(3) 加賀瀬(3) 市野(5) 西川(2) 古塚(1) 古川(1) 井上(酒)(1)

E. 藤松(3) 三井(3) 服部(2) 石川(1) 牧瀬(1)

F. 仁井(3) 秋田(4) 西部(2) 秋山(1) 井上(和)(1) 小林(1)

Time　5:00 信大思誠寮出発　電車で島々まで行き
7時までに各パーティ(Pとする)に分かれて出発する。
各P岩魚留まではあまり差がつかなかったが徳本峠では
16:00 ～ 19:00 の間に着くという大差がついた。徳本から
明神まではPを解散する。明神に着いた時はうす暗く
設営が大変であった。18:40 ～ 21:30 にわたって明神着。
三村パテ　三坂、菊地と徳本小屋に泊る。

6/3　◎　明神から横尾岩小屋の下まで

7:30 徳本小屋に泊った三村、三坂、菊地と、出向えに行った藤松
が天場に到着。
9:00 撤収したのち6月2日と同じPで出発 (三坂、三村は分離)
11:30 ～ 14:00 に各P B、C に着く。
〃 O.Bの岡村氏、入山

6/4 雨で沈殿。
O.Bの手沢氏、山下氏　北鎌尾根より下山
〃 合流、岡村氏、下山

6/5 ◎→①

A.B.C つ3Pに分かれて涸沢まで行く。 B.C 4:00出発 6:00涸沢着

A.臼井(L) 高橋、野口、柵橋、西川、今尾、氏家、古塚、石川、大宮

B.川口(L)渡部、中田、加賀瀬、鈴木、服部、福島、近藤、井上(直) 牧瀬、小林、秋田、

C.菊地(L)、藤松、三井、小川、西部 吉田、新渡戸、古川、秋山、井上(和) 三坂、市野、

D.三村、小根田、 本谷橋で三村吐き 共にB.Cに帰り、小根田一人で再び涸沢に登る。

A、B.C は涸沢で解散して全体が2Pに分かれる。

1年生主体と2年生主体とした2Pは キックステップ訓練

直登、直降 斜登、下行 トラバーク、ストップ

12:00 ○2.3年は冬山完全装備でピッケルストップ

12:30 ○1年を主体とした P は 5、6 のコルまで登り キックステップとシリセードで下る。

14:00 ○2、3年生は北尾根の斜面でスタカット登行とコンティニュアス登行の訓練

14:30 から下山 15:30 B、C 着

6/6 ○→○

前日と同様に3Pに分かれて涸沢に入る

三村調子悪くヒュッテで休養

6:20 1年は キックステップ

2、3年は ピッケルストップ

7:45

6/6

	1年	2、3、4年
8:30	ピッケルストップ	アズキ沢でコンティニュアススタカット
～		
10:30		
11:15	出発、ザイテンを登る	
13:30	涸沢岳直下	アズキ沢でコンテスタカット
～		
13:55	アズキ沢をグセード	
14:30	シリセードで下る ヒュッテ着	

全員 16:00までにB、C着
旺文社のカメラマン金海氏取材
尾崎(1) 入山

6/7 ◎

前日と同様に3Pに分かれて涸沢に入る。

	1、2年	3年
6:30	グリセード訓練	コンテスタカット訓練
～		
7:30		
8:15	ピッケルストップ	コンテスタカット
～		
9:30		
10:00	北本に向って出発	
2:15出発	北尾根P 川口(L)、藤松、小川、鈴木 棚橋	
	北本東稜P 高橋(L) 三井 西川 西部、服部	

北ホP（北ホ東稜 北尾根P以外全員）
10:00 涸沢出発

12:00
12:30 } 北ホのピーク

13:40 涸沢着、　　(注) 三村、小根田はヒュッテ前で休養。

北ホ東稜P	北尾根P
8:15 涸沢発	8:15 涸沢発
9:15 9:35 } 北ホ東稜の稜線	9:10 9:20 } 5.6コル
10:20 10:40 } 北ホ小屋	10:25 10:50 } 四山峰
11:55 12:15 } 涸沢槍	11:30 11:50 } 前ホ
12:30 12:40 } 白出コル	13:05 13:30 } 奥ホ
12:50 涸沢着、	14:20 涸沢着、

北ホ東稜P、北尾根P 共にザイルは使用せず
稜線は雪はほとんどなく夏同様

全員 16:00 までに B.C 着、

6/8 朝から雨で 奥又白の出合に荼毘りにゆく

午後は雨もあがり夜のうちあげコンパの用意をする
大きなファイアーさかこみ酒を飲む。CLは意に反して梓川で酔いをさます #Happening あり

6/9. 7:00 先発隊、川口 藤松、三村 三上(和) 出発。
8:10 本隊出発
11:00 全員カッパ橋着、12:00 専用バスで部屋に向う。

個人反省文

私達は反省文を、提出することを急りました。

大安　徹雄

秋田　敬典

小林　利安

氏家　浩三

新人合宿反省　一年部員

NO 7　秋山　美展

ここらもを和極こうがた貴まで的にた不別書考は
極みい識しはるい。るうが、と日積るいん朱部いの
積のて認少にするい入まわはこく、えとせて級てな
のとけるう告対あなにしもでうなて言たまっ上っの
へこ欠すも報に、ら部て何階いとしにっりがの思も
加うに対、省山非ま岳れ局程と何ら私があわくとる
参い識に合反の是と山ら結たがなが、良はが多いく
宿と意会場の在のまけはえるうが今てで持、たて
合いう岳のこ現りて。づに終あよンたみけ返くりれ
ないい山私、の登った向とをがのニしてわの星な生
はさと大、で分山もし方こ宿毒上一手しい員もにと
と犯う信がと自　今ま度い合必以し兎加な部刻うが
こをろはすこは。、し程な人る。トの参が級一よこ
る天帰てでなれすが部るみ新たの宿に備上はるら
すミていの的もでえ入あてて員し前合宿不各今きか
感だ得ひな人、と考ま、っし部ま宿し合は、だでこ
痛たを、東個がこのまが入そ岳い合が、てたがそ
も。か宿華くてうりの行、山て、したいま　話も
最す何合い全でいな能山が。はっめ、っつ、。のク
て、での人な。のと分状のたす分思た。かにのす山ー
て点り新めたいる自ならしで自とたた良分会まてワ。
みうな。否しないて端がまらてうっして部岳いせムが
てい分すもまはてい半れいかし上有まっ分山てわーう
えと白まとりでしつ途こてたたみがい入部大し合チよ
終足、いこあと乱に中のっっはて持てり。信がきもし
を不い思うがこ混態め分が思、し張けはすく気付頼でを
宿の使にいい由きが彫に自わと度直存欠やでなを信い
合欲きうと理べ方つのではい一い的には持とう顔。な
意気よ足のくるそととなう問見姓と最何ょ上すは

個人的反省

- まだ部屋に染まりきれず孤立的行動に出たこと。
- 合宿参加への積極的な意欲が不足していたこと。
- 全体的に新人合宿に対する認識不足が原因と思われる。

全体的反省

- 食糧の量を増して欲しい。特に朝食，昼食(＝行動食)
- 上級生との親睦は、個人的には成功した。
- 何しんにも多人数であったため、上級生各人との接触が充分なされなかったことは残念である。合宿そのものはだいたい期待通りで満足しています。以上.

NO II　石川良昭

今回の山行は、はっきり言って充実感というものが少なかった。なんだか追いたてられて登ったという感じで、受け身ものの山だったことが原因らしい。技術の面でも何一つとしてのに出来なかったということはまことに遺憾である。

細かい反省点として、今後の課題はエッセンである。もし自分がエッセンになって、あれだけの人数分をさばけるかう、今後一年間かけて身につけなければならない。そしてバーナーの扱い方にもなれなくては成らないと思う。

井上和の足が問題になったが、今後に生かして欲しい。

初めての山行、色々の点で勉強になった。どこをアタッ

クした、何の技術を覚えたということよりも、信大山岳部員がこととして山行したことが何よりの収穫であった。各々の先輩それぞれ山に対して異なった考えをもって山に接しているそと感じとれたのは、幸いだった。

最後に俺は上田の方ですが、連絡が悪く、なぜか上田が一つ孤立している感じを受けた。上田は上田で、ちゃんとやっているようですが、SACとしてはどうかなと思った。

本当にこれは問題である。そして来年はもっとひどくなりそうです。この問題を私達で考えようではありませんか！

で足もはのな方、くは向はけよしはのた。
さで弱い、靴れこのに輩ろ深え山になえ楽の人っ
のいたこさす、にた？すたおに常っ輩た
カとれ。せるず、グっかまるて行非な先冷
体り慣たのテれンがたいめえ山はにたり
の登きっ識バとニよ得思と整のパ分っぴ
分のはま認でに一ばをとけと次ン気さっ
自でりしの峠足しれ何る受ん、コいだょっ
はまなて身本満トやはくをちみのいくちょ
事沢かっ自徳も。に分てびき刻夜にてが
た週に作分果録た的自っ喜もにのなせ水
思い、れを自結記っ極でかなつ心日んさの
くいそれ、のてま積行分鮮いをハあに川
づくい。ずくさいしと山に新を葉
くりと た。靴なせびてっの後も方言に、で分
っずものひけもこたでえう後飲いと
登からでこでか、ねつ構い最をしが
でのなわい。まをろす。重いのと酒楽りあ
峠かせる後感しまを、心います。
行かのきが迷にり行時のなます。
山徳で行に誰尽れに識て山た身らいでち、
回のてにそ常知しにっ自な思たてた
今る。こっべ言、非の省らあ分ばとっめ間
あがあす一りに山反さい自れうか初仲

た不たか行向は山か激の
っカいる実で行のな感何か。ま
思体て言し、人山でくでもうか
が、的せと一のま全まて3う
い対か(山案に数今が今っあ3
ない絶書た立然人。の、立でな
なのをいを自多たもてにてで
ら私事て画、なっきっ岳しめ
かにう計しうかべ立高うた
わ1思行行たよたうに穂どた
は第てに山いのく言ク北、てい
私にず まっい山でて度しも一たは、て
に人一感はりとたてた欠
行一己を私ま話まれっが
か、う山は自み。あ対。がかか
直どいの私した、のか。こな何
行うます。
塚から私にか楽しとうあば的
るもは代しは激た然3にか神
古えて下時)私感っ自あ代洋精
言せ以校問)、にあにで時もの
とか2高変疑にとでうめ校念員
省書第。大事こてよた高の部
反を。く。うるめのた、激人
事足だどうすえ初行っし感新ケ

た北穂の登りで井上君がおくれ気味であった。しかし私の心情の底には矛盾する感情が流れていました。そう、井上君に同情する心情と井上君に極端に言うならば、もっとおくれて欲しいという感情と‥‥。このような心理状態の中でピークに立っても何の価値があったのだろうかと今では思っているのみであります。

福島 渉 (一年)

少しは覚悟をして行ったつもりだったのだが、徳本峠越えは言うに及ばず、合宿中寝ている間までしんどかった。(入口の靴の上で寝る事が多かったから) やはり考え方が甘く心がまえが足らなかったからだろう。僕の場合入部の動機も、あいつが入るなら僕も入ってみようかと言ったあいまいなものだった。そこから出てくる甘さから一年の仲間やパーティー全体に与えたものは大きかったに違いない。しかし僕にとってあれだけのパーティーに入って行動するのは大きな喜びであり誇りだった。北穂の頂上に立った時よりうれしかった。尾セードの時の喜びと同じ位の喜びがあった。

古川道裕

徳本峠これは私の一生涯名を忘れることのない峠の一つになった。そしてまた来年もこの峠を越えなければならないと思うと、どの程度まで私の力が成長したか明確になると思う。徳本、とくごう、トクゴウ‥‥ ‥‥
来年の春までは徳本峠とはお別れする。明神からの行程、横尾の設営その他いろいろの事に関する反省の前に、下山当時思った事は今年の合宿における反省は毎年今まで何回となく出ていた反省と同じ事を言っているだろうと思った。そしてまた来年も同様になるだろう。こんなでは山岳会の成長はありえないので‥‥‥
反省反省と言って次回の山行に役立てるような建設的な意見が出なかったのが(少しは出ていた)少々悲しい思いまする。横尾ベースからの涸沢往復はヘッドラ

一年部員　　毛崎一紀

一、体力の不足していた事。自分は遅れて入山したのに一日でかなり疲れてしまった。

二、火気類の取り扱い方のまずかった事。エッセンの時指示される迄何も出来なかったし、指示された事をよく出来なかった。

三、山岳部に入れば山に連れていってもらえるだろうという考えのはかった事。結局山に登るのは自分だという事がはっきりわかった。北横に登っている時そう感じた。山に対する考えを改め、もっと自分でやるんだという意欲を持たねばと思う。

四、概念図もよく書けない一という様に、入山前の勉強が不足したまゝ合宿入りしてしまった。それは天気図についても言える。やはり認識がはかったんだと思う。高校の時の林間学校の様な気でいた様な気がする。今後そういう気持をすててもっと前向きに自分でやるんだという気持をもっていこうと思う。

井上和則

今度の合宿では、ぼくのためにたくさんの人に迷惑をかけてしまった。本当に悪い事をしてしまったと思っています。あの時もう少し頑張っていればと思う所が、今になってみればたくさんあります。何と自分の弱い事よ。今までにも、自分の弱さ、甘さを見ることはできたが、こうしてはっきりした形（たとえば、自分だけがバテて遅れる）で見ることはなかった。全く痛感した。その言葉がピッタリ。その点大いに得る所のある合宿であった。

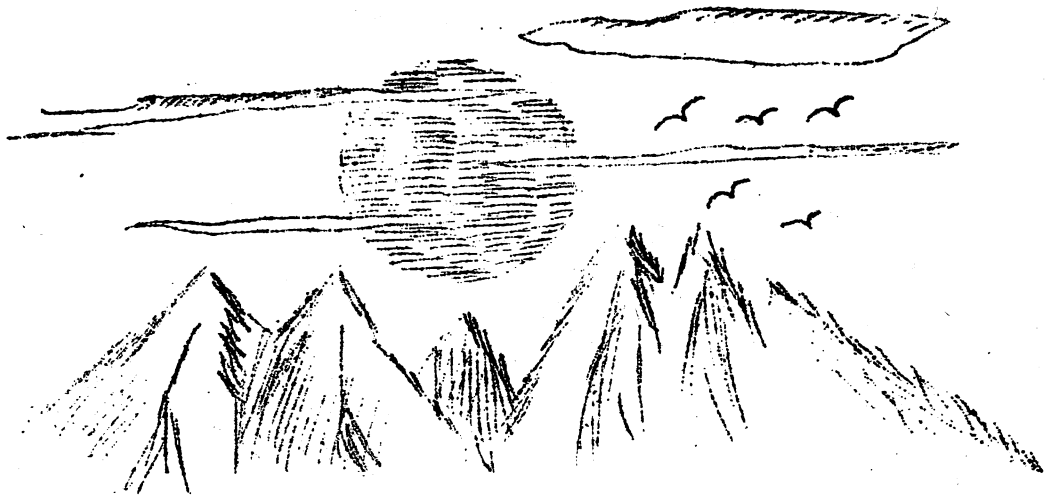
しかし、一つだけ一年部員として言わせてほしいのですが。一日だけでいいですから、余裕を持った日をつくって山の楽しさを味わえるよ

うな山行をしたかったです。来年は、ぜひ考えてみて下さい。
合宿が終わってもぼくに残された問題は、たくさんあります。これを一つずつ解決していくうえで、今回の合宿は、大きな励みになるでしょう。

－JIJ？？？ HCHO YYY－

井上直人

僕としては、全般的に今回の山行は、新鮮な感動という物が無く、山を楽しむという様な山行とは根本的に違うという事が判っていたので、大した失望もなく、こんなものだろうと思っていたので、基本的技術を習得してやろうという事をいつも心掛けていた。だからキックステップがうまくなっていく時に一番大きな充実感が味わえた。



高校時と違った事は、高校の時は、上下の差別という事が大きな事であり、大した裏付けがなかったのに、大学の場合は、それよりもっと合理的に位置付けられていた。だから、先輩を本来の先輩として見る事が出来たし、色々ながら（）とした細い注意

心底から出ていて、一々納得出来て気持ちが良かった。

今思う事は、こんな山行をいつもしていたら多分僕は山岳部をやめるだろうという事だ。もっと山のふところにひたれる様なシアワセな山行をしたい。一年でそんな自分の行きたい山に簡単に行けるなどとは思っていないが、許可が出ない時の事を考えると不安で仕方がない。又、あんなに疲れがたまったら、冬山などは自信がない。

これから、クラブと自分のやりたい勉強(?)とをうまく兼ね相させてゆきたいと思う。それが出来なかった時どっちを捨てるか自分には判らないが、自分の出来そうもない事に全力を尽してやったら充実すると思う。まとまりませんが、一生懸命やる積りです。

近藤泰年

怒ラレルモ静カニ耐エ
ドナラレルモ静カニ耐エ

足ガ痛クトモ顔ニ出サズ
肩ガ痛クトモ顔ニ出サズ

天ヲ仰ゲバ空曇リ
地ヲ見ツメレバ汗ーツ

人ノ名ヲ心ニ呼ビ
山ノ姿ヲ心ニ浮カベ、

歩ク、唯歩ク、先達ノ道追ッテ——

牧瀬敏裕（1）

非常をたあ事て
ングきっは知
的にあで行で思っ
ニくで行を思と
カ山に自己た
体足山自だっ
トレーよ不足
ト方備し苦
ング準抜で
ため、
たの進ん
だ火器
分おいて
十はを修得
自分とて
後自分な
今の他分
い。のと
た。その自
ニっ努め
ーかう
トしよたいけで
にやるっ思ったが
かとっ
ます。

驚いた。訓練はじめてだったので
これからの山行に必要な訓練は
こに行動日が出来たら
行動日的の山行を行なって欲し
訓練は無理だろうから
訓練と思う。次殿
上に雪面まで行なってこそ本当の今会の反果
行動上の雪も上て訓練。

次に北穂の頂上までのステップ、
白出のコルまでのステップ、
これは訓練の結果序々に上手
なかなか上手にならず困った。
訓練のみ……

っでい程事遂は
かうきお日たりにされる
しそごに全っあ行され
喜たし点て終で山帰たい。
穂るだっこの事例復でみ
出るだけこ言無な次回で
涙が予定おがにで異てうん
ぬる予にの力特しよを踏
ふめる学し一のはそいを
もふ大山徒なてい
ク入にんなっ
あし後みつ
る最てにと思う。
ーてと思きたさな道
で待し上いを週へ
ピ念願たそ井な障度
の残しっで。し支一
おけ上ピ
まだ雪るーで
るまだ
ステップ、なお
ステップがピ念願
あだに穂に少だ力た値てう
てまクはずを念のっはわも
スでまクはずを念のっはわも
けのたをまに思まのずリーでめの残身かにお。
つおるまを的とル日はピ定ふもも自しるにう。
をにあだ機会。ルるコ毎るヤの予がう少分れ山生願
プ沢でま度思ルな穂、ただ穂。るいは自うさ一を
ン週続め一くはに前プにま北たあとてをはま又事

三村芳和（一年）

はじめて体験した生活態度文書バカ。一生懸命書いたけれど、とても後悔の状況です。

のけ身になって考えてみる。何を書いたらいいのか。

ぶだけは一人自分はいろいろ反省

かれのこと分そよでとなかのもいを

浮そうに一自一たみるしのそをのれ

い只そ、しまい言対は第わのみなた尚薬子こ

思ってし人にで。言むて欲っ。と調がす

るも、只一事宿りを励っ食反たらのです

りたけれて一たけはた合なにくくにっか元で

たけ付でっのく先ゲめ全態思りちい

張り山まと月山まで頑張ってしまった。ンをも状く悪た短

ってしまった。今回は言葉で一千減んく少ています。

日数が経過するも、只思ってしまった。今回は言葉で一千減んく少ています。

の日数が経過するも、只思ってしまった。今回は言葉で一千減んく少ています。

下の日数が経過するも、只思ってしまった。今回は言葉で一千減んく少ています。

次の日数が経過するも、只思ってしまった。今回は言葉で一千減んく少ています。

す。確かに元気に生活するのも体験の一部だと思った。

の調子が悪くなってしまったのは合宿の分までバテてしまったからだろう。

くこん詰め過ぎ。何回でもあらゆる程度の食べ物を

反省し何度でも次の山行では合宿中はバテないようにしなければならない。

で、次の山行では合宿中はバテないようにしなければならない。

うだけもてた受験も致しますなてよず何と調っ丈

只そ思ってを過にと。

吉田秀樹（一年）

だ種しやを行しに貰す。

る一まい器山をう一ま

ていうちに食でりよのり

めていも人へ態思う会登

とかの沢状ナ思岳に

がたと他週象一。山山

なが来人ずに気ヤが。のう

来てなき特なイすこよ

て以来はで（々日在い

来て行っ方がす色ど り現な

へ来へのとまだなあた し終ら

ス体こいまは日は薬に

プ。作と思）の点業に

アルます。作をたこで反も時代

北れりったのも校学

離れ、松本へ来て以来はで（々日在い

後あのらとまれいで高大

以あじゆしを走な面たな

山た感なてを少の端っ半

夏ていが今的せのが備かっ途

の終っ感精を行こと装な中

二終心、りてたでき

高安が思っし行と

けのたな持をま山と

〈二年部員〉

市川 豊

他人の迷惑を省みないというか、型破りと云うべきか、
それとも、自分勝手というべきか、悪いとは思いましたが、
予定では1月6日から9日までの途中入山という具合でした
が、私事の為それすらも必要なくなり、6日に入山と下山の
両方やり、1日おいて下山日の前日に改めて入山しなおし、
下山はみんなと一緒にし、雪を踏むこともなく、シゴカレる
こともなく走り使いさせられることもなく過ごし、今、新人合
宿の反省なるものを考えてみると、一体、合宿に参加したのか
不参加なのかさえ、疑問です。

他の学部の皆様と共に過ごした時間は、個人の値が
ですが、その間の収穫とやらは、新人部員の苦心と親を
大部分覚えたぐらいかと思います。それにかえて、部室
での2年生部員の反省も考えさせられることもあり、また
最も気がかりで、かつ、申訳なく思っていることは上田部
員担当の記録という大切な役割を果たせなかった
ことです。報告書を作って下さる部員諸氏に脱帽し
たい心境です。

去年の下山日は、前を歩いていた2年部員の脚をけと
ばしたく思って歩いていたのですが、今年は荷物が
軽く、所為か、そんなことは全く考えず、ただ、今年の
1年部員は怖いと思いました。

小川邦一

今夏 自分のスケジュールを眺めてみても仕方がないけど、
まず今回の合宿に関しては最低ではなかったかと思う。
事前にバテることがわかっていたにもかかわらず トレーニングを
なまけ、それに甘んじていたのは 大きな問題である。それに、
ただありがい行く、参加しない訳にもいかないから参加する。
そういった自分の消極的姿勢にも問題があると思う。
はっきりした目的を持つということが大事であり、そうすれば
もっと精力的に動けたのではないかと思う。それから、自分の
技術の未熟さというものも大いに感じ入った。キックスタンド
1つをとってみても自分以外の新人に指導することを考えてやれ
なかった 自分できないとできもしないことも指導することなんか
できようか。まだまだ教わる面がかなりに多いのではないか
と思う。

とにかく今回は比較的天気にもめぐまれたし、新人
合宿の主目的である、新人の雪上技術の育成という点で
は効果があったと思う。楽しい新人合宿であったとは言い
たいが……

鈴木 忠

昨年の反省会において2年生が1年の指導の難しさを
多くあげていたのに対し、全く実感が無かったけれど今回
身にしみて後輩の指導の難しさというものを教えられた。
後輩の指導も心理学的にいう"リーダーシップ"と
考えるのなら、①ある結果を得ようという欲求(目標) ②結果を
得る為の努力 ③気質の度合 ④結果に対する満
足度(もちろんその全ての満足度)という4段階を

を自分にいう。

ところが、今合宿において(2)が充たされないことが多かったように思われる。指示者(指導者)非指示者が共に結果に対し満足し、充実感を得ることを頭に入れて、自分に指導したつもりだが、精神的、肉体的に疲労にいることもあって、おさまい気がたって思うように動けないということがあり、残念に思う。しかし、皆が、思いやりと誠意をもって付き合っていけば、快な気持ちになったり、妙な誤解をもつこともなく、受容的に事を行なえると思う。下級ごの心得を心にもっていけばいいのである。心に入ったかどうかは、特別討議的になる必要はないと思うのだが…。ただ、今までの小委員会の慣習的なことを、上級生が"当然のこと"として下級生に押しつけるようなことがないか、今一度考え欲しい。

新人諸君に、反省会で謝が言った言葉、「新人合宿だけが小じゃない。」を忘れないで欲しい。小さ隙限り知れない程の魅力があるのです。

棚橋秀顕

短いようでやはり長かった新人合宿が、無事完了して良かったと思っております。さて、今の反省としては体力不足、技術の未修得さが取り上げられると思っています。これらの欠点はなくなりに徐々に直にいく必要です。やはり、なにか責任を感じる感じ方が自覚になりましたので(ウハハハ!)以後前向きに取り組みたいと思います。さて今回の合宿はあっという間、いや全くと言ってもいい程、

合理的なモノに直ぐ変わった。その為に ぼくらとしては、最初はそうでなかったのですが、後半になるほどと参加することへ 又ついて行の無意味さを感じないわけにはいかなかった。

西川義満(2)

- 二年部員としての体力が不足していた。
- 山のコトをほとんど知らない新人達に、要点をふまえた指導の仕方が出きず、彼らをとまどらせることになってしまった。
- 反省会で述べた事の繰り返しになってしまいますが、以上の二点を個人的な反省点とします。
- 部員となって一年余り、今回も下山が待ちどおしい山行でした。いつになったら、山から離れることに寂しさを覚えるようになるのやら。
- あのように訓練ばかりやって、はたして効果があるのかしら。
- S.A.C全体では無理な点が多すぎる。
- S.A.Cはもう少しアカデミックな集まりでありたい。

以上、感想、希望等であります。

西部孝明(2)

今回の新人合宿では、まず第一に自己の体力不足を痛感した。体力不足とともに、靴ずれができた事は、自己の行動を半分に制限したように感じる。そのために新人に気を配る事が十分できなかった。新人の世話は十分にできなかったにしても、新人の中に入ることはできたと思っているのだが。

時間に追われがちな合宿は、自分としては非常につらいし、山岳部に属している事がすでに、自分にとっては良いのかどうか疑問は多いが、今回の合宿は、一面では非常に有意義な山行だった。

服部幸雄(2)

今年の新人合宿の反省会においてしばしば「今度のような形式で来年も合宿をするならば、それは無意味であって他の何ものでもない」という声が聞かれたのはなぜだろう

か。つまるところこのことは、合宿に積極的な参加をしようとしない者がいくら集って山にいこうと、何の楽しみもないし、又どれほどの成果が得られるか疑問であることを示しているのではないか。確かにS.A.C全体でやることは、各部の部員同士の親ボクを図るという点では、この形式はよいかもしれない。しかしわれわれはそれを主目的として山に行くのではないのであって、山そのものへ登り、親しみを持つことが眼目にあるはずである。つまりそのような考え方をする時、今回のような形式の山行ではその目的さえもどこえやら。いい方をかえれば等しそろそろ自分の好みにあった、つまり各人の個性に等しい山登りをしていく可きときではないだろうか。またそれの意味で一年生においては積極的な上級生での働きかけがあってしかるべきだと思う。

最後に今度の合宿ではトレーニング不足のために、いろいろ迷惑をかけ、申しわけなく思っています。十分反省しています。そこでみなさん！トレーニングはおこたりにしないように。なぜかってそんなことは今回の山行で十分にわかっているはずね。

〈三年部員〉

白井　武

毎年言われることであるが、新人合宿に於て上級部員の楽しみはグリセードだけである。そして今年も忠実にその通りの結果に終った。リーダー、並びにリーダー部員には、それぞれの考えもあり、色々苦労も多かったことであろうから、体調が悪い、ゆうつだと言って毎日何もせずブラブラしていた小生ごとき者が、批判する余地はあるまい。ただ言いたいのはリーダー部員は、上級生、特に三年生への見方を改めてもらいたい。二年間も四年生が何をしてきたかをこの目で見て来た三年生である。昨年のような足りない方で今年もやろうと言うのだろうか？

今回の新人合宿でも三年生は、十人いたんだということを忘れないでほしい。

川口　隆

本来合宿とは訓練的な意味あいの強いものであるが我々"山"と云うものを共通の場としている山岳部に於て、訓練と云う名のもとに行なわれたものがいかなる意味を持つのか疑問を感ずにはおられない。僕の主義としては、山に入っている間の訓練は、全てとは言わないが、意味無きことと考える。

そして現在の山岳部内においては、合宿に意欲的に取り組んでいる者は非常に少なく、大勢としては、仕方なくと言うか、義務感として合宿に参加しているのが実状である。それは個人的な問題以外に合宿の内容に上る所が多いこれを本来の小登り、approach を含めたpeak huntに戻すために諸君の意見を聞きたい。

菊地　宮人

下山後、すぐやった反省会では、いろいろ批判も出ていたが、よくよく考えてみると新人合宿とはそんなものであり仕方がないのではないかと思う。ただこの合宿は訓練合宿であると共に年に一度のパイクの祭りでもあるのだから、もっと訓練なりにも楽しくやれる様にしてほしかった。L.L.氏はひたすら訓練的なことばかり強調しておられたが、それなら各山岳部ごとにやった方が能率的であるし、もっとゆとりのある合宿にしてほしかった。

新人に一言だけ言わせてもらうと、もっとズクを出して自分から仕事を捜してするということをやって下さい。

二年生に対しては対力不足は問題外ですし、その他の点では行動中新人に対する配慮に欠けているということを除けばまあよくやってくれました。

自分を含めて三年生は一人もいながら一体何をすべきかわかっずうっとウロウロしていただけという感じがします。まだまだ僕達はリーダーとして未熟であると思う。又三年目となるとズクもなくなりテントでゴロゴロがふえ新人のことも考えず食い意地ばかりはってズクぶとって行くような気がする。これでは今に自分の荷物すらかつげない登山無資格者になってしまいそうで今から心配している。ただひたすら純粋なアルピニズムを目指す小生としてはもっとトレーニングにはげみ、体力の増進を、計るべきなのではあるが、多言不言行の性格故そういうことは大々的に言わないことにしよう

加賀瀬豊彦（3）

毎回同じような反省文を書くのは、書く自分はつまらないし読む人も面白くなかろう。今回から変身をとげ華麗なるイナオリに終始することにする。

目的が、雪上技術訓練であったそうなが、それにしてはどうも、上級生部員には中途半端なものであったようだ。それに言ってはなにだが、一部リーダー部員のズクの無かったこと、それならばそれでもいい。しかし我々にズクの無いことを、責めることはしないで欲しい。あの程度の行動であり、又上級生部員の多さなどから見ても、自分としてもあの程度のズク、態度で十分だったと思うし、我々の方が数倍ズクがあったのだから。これ以上に我々にズクを期待するのならば、リーダー部員が先頭に立って見せて欲しい。もちろんそのほかの上級生部員の内には頭が下がるほどに、ズクの有る人がいたことも事実ですが。

残念ながら本合宿は何かこう盛り上りに欠けていたという感が大部分を占めている。コンパのときだけ盛り上がるのでは、山岳部とは言えないのです。

最後に、ここに私は公表します。
本合宿のビール紛失事件の首謀者は、私ことMJIです！
マァ、愛嬌よ　ワリ～！　ワリ～！

三井和夫（3）

・個人的には
三年生が、目立ちすぎて、二年生は思う存分動けなかったように思います。これは又、四年生が先頭に立ちすぎてその影響でなったとも言えます。つまり沼沢ヒュッテまで、もしくは雪上訓練（1年生の）まで、完全に三年生にリーダーシップを取らせるべきだったと思います。三年生がリーダーであったにもかかわらず、四年生がリーダーの如くふるまう一面も見られま

した。

三年生がいままでになく、雪上訓練をしたことは非常に結構なことです。あれは今後もやっていくべきでしょう。しかし、四年生が、そのカリキュラムに含まれていなかった事は若干の疑問点が残ります。技術確認のよい時期なのですから。三坂さんは、コンテ・スタカットの練習に参加しました。そういう面を他の四年生にも、持ってもらいたいものです。我々の技術は不完全でより完全にする努力は失わたくないと思います。

今回風邪で入山を止めようかとも思いました。合宿中、前半、中盤は風邪のひどい時で、何もやる気をなくした訳で、どうしてもしなければならない事以外手を出さなかった。ズクなしになりかけていることを痛感しました。

○遺対面

三村、井上の症状の判断、他のメンバーのバテぐあい、ケガの治療法etc 各人が知識を集積し、確認しあう必要がある。登山研究修所へ行った人は治療法、ホータイ法など、習っているのであるから、何かの林会に公表すべきではないか。

新人の靴ズレは毎年後を断たないが、平地でもっと徹底した、はき方をさせるべきだったと思います。

雪上訓練にしても、ひざの使い方が、全然なっていないので、又体が硬いので、柔軟体操他、走るだけでは、だめだったと思います。

下山後のミーティングでも話がされたが、チーフ・リーダーの専制は批難の対象となる。カリキュラム（その日1日の）の不備。メンバーのイライラの対象となるC.L.の現地での行動発表。C.L.の特別なバテ方。やはり、あんなにバテてもらっては困ります。上記は、C.L.の測り知れない苦労を想像しても、なお残る不満な点です。

新人合宿 反省とそれから 駄文一筆　渡部光則（3）

今（6/15）、肉体も頭も風邪のため、えらく消耗しているので、なかなかうまくペンが走らない。合宿の反省といっても、もう小生も三年部員、ズクなしは、いくらも改まってはおらないが、それを通り一遍の反省云々で片づけて、提出、という程の宣場ではなくなったようだ。信大山岳会に入ってから、三度目の新人合宿。大体スイも甘いも、わかりきった頃だ。一体これから、型通りに何を反省してどうしようというのだ。小生のダメであるところは、自分でも充分わかる位だから、他人の目から見ればもう何をかいわんやだ。でもそんな小生ながら、新人の諸君には、毎春期待を込めて、張り切って入山するのだがなあ。山に入れば、今回程、只々自分の認識不足と無知なるものをさらけ出したのを痛感したことはなく、パーティの皆んなに、いろいろ迷惑をかけて深く反省します。そしてとにかく山行をして、学びかつズクを出すだけだと思います。

用話休題　新人諸君に。貴方達の山登りは、これからです。新人合宿が、あれが山登りの全てだと思わないで下さい。そんなこんなで、失望したり、反撥したりで、合宿のすんだばかりの今、貴方達に部を去られると、小生は非常に悲しく、寂しく、かつやるせなく自分自身にどうしようもないイライラと怒りが生じてきます。　これから梅雨。そんな季節の中でも、僕達は山行きを重ねますし、それに梅雨があければ、待望の夏山です。いろんな未知なる広い世界へ飛び出して、愉快な大らかな山行をやりましょう。そうした積み重ねの中で、小生もオゾイで、一緒に山を勉強していきましょう。

今回の新人合宿は、小生の考えた本来の山登りから遠く離れていると思うけれど、それはそれなりに、特に小生達の山岳部の様に、個人山行中心の部の行き方の中では、いろいろと大学山岳部の難しい課題と矛盾点、問題点を考えると、致し方のない、一つの合宿のやり方だとも思える。（その合宿内容そのものは、今回のそれでは、大いに改善していく点があると思うし、指摘出来る。具体的に一つ一つというのは別の機会にする）----小生を含めて、部員に多く

の不満を残すけれど。そんな話とは別に、あの下山後の草の上での反省会で、MJIが口にした、「40人ものズクなしが集まっての合宿がどえらいしんどいもので、又効果うすいものであるか」という言葉と共に、一年の諸君の間で、小生の事を、「○○のワタナベさん」何て言われていることを知らされ、小生もそんな学年になったのかねと、一つの感慨と同時に、何やらしみじみ考えさせられもした。

新人合宿を終えて　　三坂健次(4)

長かった空ろな日々の後で、まるで新人のような新鮮な感動をもって、山に入ったはずなのに、その割に印象がうすいというのは、いったいどうしたものだろう。

正直いって、自分の四年生としての立場がいったいどんなものなのかよくわからなかった。自覚が足りないと指摘されるなら甘んじて受けよう。しかし、いったい四年生は、三年生以下の人達から見てはたして、上級生だろうか。ただ四年間部に籍を置いているからというだけの理由で、四年生、上級生、先輩というのはおかしい。君達が「先輩」からもう学ぶべき何ものもない時がきたと考えたら、その時には先輩と呼ぶのはよそう。

君達は、山に登るために部に入ってきたのではなかったのか。

高橋 雄治

新人にとっての穂高岳は大変なものである。みんなよく頑張ったと思うだらしがないのは二年生だと思う。前に経験があり、自分の体力も知っているはずなのにバタバタ倒れる。あんな体力ではたとえ個人山行であっても十分なリーダーシップを発揮できるわけがない。

合宿の行動で問題なのは二、三年生の行動であると思う計画書にはっきりと載っているように、二三年生のリーダーシップの養成に重があったはずである。しかし行動を考えてみるとリーダーシップのうちの団体をうまく動かし、上手に使うといった二次的なものしか養われなかったような気がする。一番大切な判断力は雪上訓練をやって養えるものではない。今回の合宿は自分の登山観とはかけはなれた存在であったと思う。いわゆる大学サークル運動部のような気がする。登山とはスポーツを超えたより深いものだと信ずる。従って大学サークル運動部員のような人間が多くなるのはさびしいことです

和尚

"やるだけのことはやった"一年部員にはそんな充足感があるのではないか。しかしあの私たちの行手を拒否する様に雪の斜面をしたがえ、青空に気高く純白のコスチュームを着て、そびえている山々に対して持っていた情熱のどれ程をぶつけ得ることが出きたか、それは疑問だろう

私は一年部員に山の良さを知ってもらい、これからの精進の糧にしてもらいたかった。事実それがなし得ていないならば上級部員はその問題点を厳密に調査し検討して、その原因を解明し、すみやかに解決策をこうじなければならないし、上級部員の個人個人に問題点があるならば各人は謙虚な態度で、なほ一層の努力を

しなければならまい

物事はその存在を知るだけではいけない、その意義をもくみとらなければならない。1には1の意味があり1の扱い方があるのです。今合宿は、C.L.の上級部員を何如に動かし得れば最適かと云うことを考えずに十数名以上いる上級部員をもてあましてしまったのではなかろうか。

Partyに於てC.L.は最高責任者であると同事に最高権力者である。しかしそれは、あくまでも、memberの各人をしっかりと識った上でのことであり、それなくしては独裁者になってしまう。これは、上級部員全部に言えることである

現代の物の考え方、行動の仕方は登山界にも及んできた。今迄通りの上級部員イコール神様という封建的山岳部は存続を断たれ新しいイデオロギーが台頭してきた。今々山岳部の神話は崩れ去ったのだ。千級生よ真の山の基に団結せよ

野口　彰

大学山岳部に入って三度目の新人合宿が終った。上級生の言われるままに何もわからずただただ一生けん命だった新人の時、一年部員というくつわをぬけて、初めて若干ながら指導する立場に立った時、そして三年部員として責任ある立場としてやらなければならない事がいっぱいあった合宿であった。

人の上に立って指導し、又自分自身の前進を計るということがどんなに困難なことか身にしみてわかった合宿であった。

又、多人数の煩雑さと云うことも痛感した。SAC全体での新人合宿の意義は大いに賛同するものだがもう一度各山岳部で各々の新人合宿を検討してみてもよい時だと思う。

新人諸兄には，上級部員に対し，又それ以上に自分自身に対し至らないと感ずる所が多々あったと思う，何事もこれからであるくじけず精進して欲しいと願うものです

藤松　太一

今年は天候に恵まれ，去年よりは，主目的であった雪上訓練はある程度の成果は上がったと思う上級生となりはたして上級生と云う重要な役割りを十分に出来たのであろうか山岳部という一方の体質の中に染まりつつあった事も事実であった．テントの奥へ奥へと，そして，同時に腰も重くなり，ズクがなくなってしまった。今後の山行と山岳部を考えた行動をする為にもこれらのものを克服しなければならない

今回の合宿に於て一年生はあんなものであり，この合宿よりこれからの山行，合宿で，伸びてほしい，二年生に関しては徳本峠に於ても涸沢の練習に於ても，何かもの足りなさを感じる，その一つは，体力的にかなり弱いのではなかったかと感じざるをえない，今合宿を見て，又はリ，ントワークなり先に立って新人に指導してほしかった．

今回も多くの問題を残して，無事終わることが出来た。俺にとってはこれで最後の新人合宿であると思う将来のSAUの為に，部員一人一人の為に問題を一つ一つ克服してほしい

山はぼくたちの憶い出のなかにひかり輝いている。
過去における星移模であり、未来への指導標である。

Achttausend Drüber und
Drunter

By Hermann Buhl